

Archaeological Site Conservation and Local Residents: Japanese Experience and its Application to China

Dongdong WANG

ABSTRACT

In light of increasing threats posed by natural disasters and urbanization, as well as the need to display and utilize archaeological heritage, Chinese archaeological sites, especially large-scale examples, have been actively conserved since the turn of the 21st century. However, the wishes and emotions of local residents who are affected by site conservation have often not received due consideration. In order to protect archaeological sites, benefits to local people must often be sacrificed to prevent destruction, while common conflicts include the relocation of houses and land acquisition, preventing illegal construction within the heritage area, and generally low participation of residents in site conservation and utilization. Remediating clashes and enhancing the harmonious coexistence of conserved archaeological sites and local residents is the primary aim of this research.

The case studies selected for this research were the sites of Liangzhu, Yin Xu, and Han Yangling as these are all characterized by a close relationship between conservation efforts and local residents. These sites were selected to enable a comprehensive study of residents living within and adjacent to Chinese large-scale archaeological sites. On the basis of a review of processes of archaeological site conservation as well as a survey of the attitudes and living conditions of locals, this study identified three main disparities between the implementation of conservation policies and plans with respect to the

wishes and feelings of locals that are referred to here as basic survival, diverse participation, and the recognition of local culture.

These issues have been addressed in China with reference to other international experiences. At the same time, the conservation of Japanese archaeological sites has enjoyed a long history encompassing a variety of experiences and achievements. To reflect this diversity, Nara Palace, Sannai-maruyama and Goshono, as well as a number of other typical archaeological sites within the Fudoki-no-oka project were selected as case studies where similar issues mentioned above have already been solved. Problems to do with land acquisition and house reconstruction have been solved effectively at some sites, for example, while the participation of local residents and organizations in site conservation and utilization are frequent, a range of activities are held regularly on sites to commemorate the history and to educate the public, finally local people feel deeply embedded within the regional culture. Thus, a number of insights can be drawn from Japanese experience and applied in China to realize the enhanced conservation of archaeological sites. This study summarizes two principles for minimizing the impact of site conservation on locals while at the same time maintaining links between people and sites, as well as four strategies that include effective communication, regular activities, the search for economic benefits, and strengthening public consciousness. The approaches advocated here were applied in practice at the Xiaotun Village locating at Yin Xu site by taking advantage of successful Japanese experience.

This research highlights research approaches that involve residents in the cultural resource management. In the first place, great effort was taken to investigate and collect data on locals, an area that has generally been lacking in terms of publications in China and systematic summaries in Japan. Second, this study presents a panoramic view of Japanese models that address the involvement of local residents in site conservation and utilization and then applies them in China. Third, this research was applied in practice to

generate feedback which explored the possibilities of various proposals. Thus, this research is both theoretical and practical.

It is hoped that this research will not only provide an academic benchmark for cultural resource management but will also serve as a guide and source of ideas for administrators, site managers, and locals.

Key Words:

Local Residents Chinese Large-scale Archaeological Site Conservation (CLASC)

Japanese Archaeological Site Conservation and Utilization (JASCU)

Comparative Study

考古遺跡保護と地域住民

—日本の経験とその中国への応用—

王 冬冬

要 旨

21 世紀に至るまで、中国における大規模遺跡は保護が進められ、公開・活用も進展しつつあるが、同時に、自然災害や都市化によりもたらされる様々な脅威にさらされてきてもいる。このような保存活動による影響を受ける地域住民の感情や要望はこれまでほとんど考慮されてこなかった。遺跡の保存・活用への住民参加の低調さに加え、保存区域内からの強制退去や土地の収用に伴う衝突、保存区域における不法な建築など、遺跡保護のために地域住民の利益が犠牲となり、また住民の要求を満たそうとすることで遺跡が破壊されるといったことがしばしば生じてきた。本研究では、どのようにこれらの衝突を回避し、遺跡保護と地域住民との共存を達成するかを明らかにすることを第一目的とする。

本研究では、中国大遺跡近隣住民に関する包括的研究のため、保存活動と地域住民が密接な関係を持つ事例として、浙江省良渚遺跡群、河南省殷墟そして陝西省漢陽陵を取り上げる。遺跡の保存過程を概観し、地域住民の態度や生活状況を調査することにより、地域住民の要望と意識に加え、保存政策の実施と計画に関して、日常生活、多様な参加形態そして地域文化の認識といった 3 つ観点から主たる問題を明らかにした。

中国におけるこれらの課題を解決するために、国際的な事例について言及す

る必要がある。日本の考古遺跡の保護の歴史は長く、その類型也多岐にわたる。そこで、本研究では類似の課題を解決した事例として、奈良県平城宮跡、青森県三内丸山遺跡、岩手県御所野遺跡そして各地の「風土記の丘」事業を取り上げる。たとえば、土地買収及び住居の改築に関する問題は円滑に解決がなされている。遺跡の保存・活用に対する地域住民や地域組織の参加もしばしば見られる。また、歴史学習といった社会教育のための様々な活動も定期的に行われており、地域住民は地域文化への高い帰属意識を持つ。日本におけるこれらの経験からは、中国の遺跡においてよりよい保存活動を達成するためのいくつかの見通しを得ることができた。効果的なコミュニケーション、定期的な活動、経済的利益の追求、意識の強化という4つの取り組みに加え、地域住民への影響を最小限に抑え、住民と遺跡とのつながりを保つという2つの原則が挙げられる。最後に、日本の成功事例に基づき殷墟の小屯村において試行が始まった事例を紹介したい。

本研究では、文化資源マネジメントにおける住民研究の手法を明らかにしている。まず、日本では体系的にまとめられているが中国においては不足している地元に関するデータについて調査し収集することに多大な労力を払った。次に、中国の遺跡の保存と活用における地域住民の関与について、日本におけるモデルの全体像を詳細に提示した。そして、日本の経験から学んだ解決策を中国に援用する可能性を見出すことができた。したがって、本研究は理論的であると同時に実践的研究でもある。

本研究が文化資源マネジメントの学術研究としてだけではなく、行政官、遺跡管理者、そして地域住民が発想を得るための手引きとなることを願っている。

キーワード

地域住民 中国大遺跡の保護 日本の考古遺跡の保存と活用 比較研究

学位論文審査報告書

平成30年 2 月 6 日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専 攻 人間社会環境学

氏 名 王 冬冬 (Wang Dongdong)

2 学位論文題目 (外国語の場合は、和訳を付記すること。)

考古遺跡保護と地域住民－日本の経験とその中国への応用－

3 審査結果

判 定 (いずれかに○印) ○合 格 ・ 不合格

授与学位 (いずれかに○印) 博士 (社会環境学・○文学・法学・経済学・学術)

4 学位論文審査委員

委員長 中村 慎一 ⑩

委 員 中村 誠一

委 員 足立 拓朗

委 員 鏡味 治也

委 員 菅原 裕文

委 員

(学位論文審査委員全員の審査により判定した。)

5 論文審査の結果の要旨

現在の中国ではユネスコ世界文化遺産の申請などとも密接に関わりながら大規模遺跡の保護・整備が急ピッチで進められている。しかし、遺跡の保護とそこにもともと居住していた住民の生活との間にはしばしば軋轢・衝突が生じる。大規模遺跡の保護・整備と住民生活の維持・向上とをいかに調和的に共存させるか？それが本論のテーマである。

具体的には、河南省殷墟、陝西省漢陽陵、そして浙江省良渚遺跡群が取り上げられる。いずれも世界遺産、あるいはその候補となっている重要遺跡である。それぞれについて、遺跡保護の進展にともなう住民生活の変化、遺跡保護・公開への住民参加の様態、そして地域文化に対する認識の変容といった事柄が文献調査、聞き取り調査、アンケート調査を通じて明らかにされていく。

同時に、中国における諸課題解決のための参照事例として日本諸遺跡での取り組みについて同様の調査が実施される。その対象となるのは奈良県平城宮跡、青森県三内丸山遺跡、岩手県御所野遺跡、そして各地の「風土記の丘」事業である。

最後に、日中両国の比較研究の成果が述べられ、日本での経験を中国へと敷衍する可能性について種々の提案が行われる。

論文全体の構成と各章の内容は以下のとおりである。

第1章「はじめに」では、研究の背景、目的、対象、方法について述べられる。

第2章「考古遺跡の保護と地域住民および社会」は研究史のレビューであり、中国内外において大規模考古遺跡の保護がこれまでどのように進展してきたか、それに関わるアクター間にどのような葛藤・軋轢・衝突が生じる可能性があるか、といった事柄について主要な関連文献を引用しながら整理されている。

第3章「地域住民と中国の大規模考古遺跡保護」は論文全体の中核をなす部分で、多くの紙数が割かれている。まず、中国における大規模事業の歴史を回顧し、関連法規と関連機関・組織について概観し、世界遺産登録申請との関係に言及した後に、河南省殷墟、陝西省漢陽陵、浙江省良渚遺跡群の3ヶ所での現地調査の成果が披瀝される。

続く第4章～第6章は比較研究としての日本の事例研究で、第4章「生存維持問題の解決：平城宮跡の場合」、第5章「三内丸山遺跡と御所野遺跡の保護・活用における住民参加の多様性」、第6章「地域文化の創成：『風土記の丘』事業の事例研究」となっている。

実質的な結論部分といえる第7章「考古遺跡の保護・活用と地域住民との関わりに関する日本の経験とその中国への適用」では、日本での成功の要因として、地域住民への影響を最小限に食い止めること、そして地域住民と遺跡との繋がりを保つことに努力が払われてきたことを挙げる。さらに、1) 地域住民と遺跡管理者との間の効果的なコミュニケーション、2) 地域住民の参加ないし援助をとまなう定期的な活動、3) 遺跡保護の前提としての地域住民の経済的利益の追求、4) 遺跡の保護・活用に関する意識啓発の4点が必要であることを指摘する。

第8章「殷墟遺跡の保護に関わる小屯村での実践」では再び殷墟遺跡の所在地である河南省小屯村を取り上げ、日本の成功事例を参照しつつ、遺跡保護と住民生活向上の両立を図るための施策の可能性について検討が行われる。

最終章第9章が「結論」である。

本論文に対する評価を先に述べるとすれば、全体的に見て博士号学位請求論文として十分なレベルに達していると判断される。特に中国の3ヶ所の遺跡における現地調査は、これまでに同種の調査事例がほぼ皆無であるだけに、先進性・独創性が際立っている。今後

の中国における同類研究の一つのモデルとなるものと言える。もとより、必ずしも重要なキーパーソンへの聞き取りに成功していないこと、アンケート調査が規模や方法の面で信頼性に欠けることなど、少なからぬ方法上の問題点を孕んではいるものの、土地収用問題などの微妙な社会問題に果敢に切り込んでいった姿勢は高く評価することができる。

日本での調査に関しても、奈良県平城宮跡における土地収用と遺跡整備の経緯は日本人研究者によってもこれまでほとんど実証的に研究されてこなかったテーマであり、出色の成果であると言える。日本の学界に対しても十分にインパクトのある内容であるため、日本語による論文発表が待たれる。

筆者は博士課程リーディングプログラムの学生であり、文化資源をいかにマネジメントするかという強い問題意識をもっている。第7章～第9章の内容がまさにそれに対する回答である。先に紹介した第7章での指摘事項は一見ありきたりの結論ではあるが、我が国では当たり前のことが中国では必ずしも当たり前ではないという現状の中で、このような指摘を行うこと自体十分な学術的、ひいては社会的意味を有している。

日本における成功例ばかりでなく失敗例についても検討を加えるべきであったこと、現代中国ならではの手法—たとえば SNS の活用—などについてもより踏み込んだ考察があってもよかったことなど、改善すべき点はさらにいくつか存在するものの、今後この分野で中国の第一人者になるであろうとの予感を抱かせるに足る力作であり、博士号授与に十分に値する成果であると審査員一同判断した。